

火野葦平「取りかえばや物語」論

— その典拠と改変 —

増田周子

Hino Ashihei's *Torikaebaya monogatari: Sources Transformation*

MASUDA Chikako

Hino Ashihei wrote a number of small works based upon his innovative interpretation and 'novelisation' of the *Liaozhai zhiyi* [Jp: Ryōsai shi'i], a Chinese classic. These works were collected in eight volumes and published under the title of *Chūgoku enshō fūryū tan* "Elegant Chinese Erotic Ballads" on January 10, 1951 through Tokyo bunko. There are a number of other works also based on the *Liaozhai zhiyi* in existence. Nevertheless, until the Heisei era, these other works by Hino Ashihei – who is widely known as a post-war author – attracted very little attention. The other *Liaozhai zhiyi* derived works discussed in this paper were all written during the purge of public officials, and are thus extremely important in any consideration of Hino's post-war literature.

In this essay, I shall explore Hino's humour in his *Torikaebaya monogatari*, a reworking and expansion of "Liupan", a chapter from the *Liaozhai zhiyi*, a tale in which heads can be exchanged.

キーワード：火野葦平 公職追放 『聊齋志異』（「陸判」） 改作 「創作ノート」

序

火野葦平には、中国古典文学『聊齋志異』を元に改変し、再小説化した作品群がある。それらは、全て『中国艶笑風流譚』（昭和二六年一月一〇日、東京文庫）に八篇収められている。それ以外にもまだ、『聊齋志異』を典拠とした作品が、数編は存在する。しかし、平成年度に至るまで、戦争文学作家として世に知られている火野葦平の『聊齋志異』関連作品は、ほとんど注目されてこなかった。火野葦平は、早稲田文科時代に、

私は杜小陵と李太白との詩に惹かれて、自分も漢詩つくつたりしたことあつた。私のやうな浅学な者はたちまちそのむつかしさに辟易して、やめてしまつたが、それがきっかけとなつて、両詩人の唐本詩集とならべて、商務印書館版の「古今奇観」や「聊齋志異」を机上におくやうになつた。

そして、それを漢和辞典をひきながら熱心に読み、興趣のつきざるものをおぼえた。¹⁾

と記している。火野は、早稲田大学在学中の大正十二年から、『聊齋志異』をむさぼるように愛読していたのである。ちなみに、商務印書館版『聊齋志異』一卷に、「陸判」は収載されている。

火野葦平が早稲田大学在学中に、自費出版した処女童話集『首を売る店』²⁾に収録され、タイトルにもなった「首を売る店」という作品は、首を売る店に行き、首をとっかえひっかえしているうちに、誰が誰かわからなくなり、しまいに皆喧嘩をし始めるという作品である。これは、『聊齋志異』の「陸判」との関係がみられる。火野は、早稲田大学時代に、既に、「陸判」を読み、気に入っていたようである。火野葦平と『聊齋志異』は、火野の初期文学から深く関係し、火野文学を考察する上で欠かせないものである。

火野葦平は、昭和一三年に「糞尿譚」で第六回芥川賞を受賞し、その後陸軍報道班員として従軍した。命を惜しまず闘う兵士達の真実に迫る姿を描いた兵隊三部作が、人々の心をとらえ、ベストセラーとなった。大流行作家になった葦平は、戦地から帰国すると、報道陣やファンに大歓迎され、各地で講演に呼ばれた。母校、小倉中学での葦平の講演のことを、当時の校長であった中村十生は次のように記している。

私が校長時代に三回全校生徒に講演してくれた。(中略)一席の講演をブツ場合でも、思いつきでお茶を濁すことなく、想を練り練りして壇上に立ったと思われた。——私が早大に志願したとき数学の教師が志願したって合格はしない。合格したらクビをやるといった。合格したけれども未だ首をくれません——とブツて生徒を爆笑せしめた。³⁾

小倉中学時代に、早稲田大学など合格はしないだろうと言われ、「合格したらクビをやる」と言われたことが、葦平の念頭にあり、首を取り換える話には、早稲田大学在学中に特別な興味を持っていたのであろう。火野は、講演などで「生徒を爆笑せしめ」させるなど、ユーモアセンスは抜群であったようだ。

さて、本稿では、首を取り換えるという話『聊齋志異』「陸判」をもとに、加筆、改作した「取りかえばや物語」をとりあげ、火野葦平のユーモア性のある一側面を考察していきたい。

一 火野葦平「取りかえばや物語」の成立

「取りかえばや物語」は、昭和二六年二月一日に、『キング』に、田村閑の挿画を入れて発表された短編小説である。その後、『東洋艶笑滑稽聚』(昭和二七年五月三〇日、東京文庫)に「とりかへばや」と改題されて収録された。

火野は、この作品を成すにあたり、「創作ノート」を残している。初公開のものなので、翻刻し、全文をあげて見る。

取りかへばや物語

聊齋志異「陸判」より

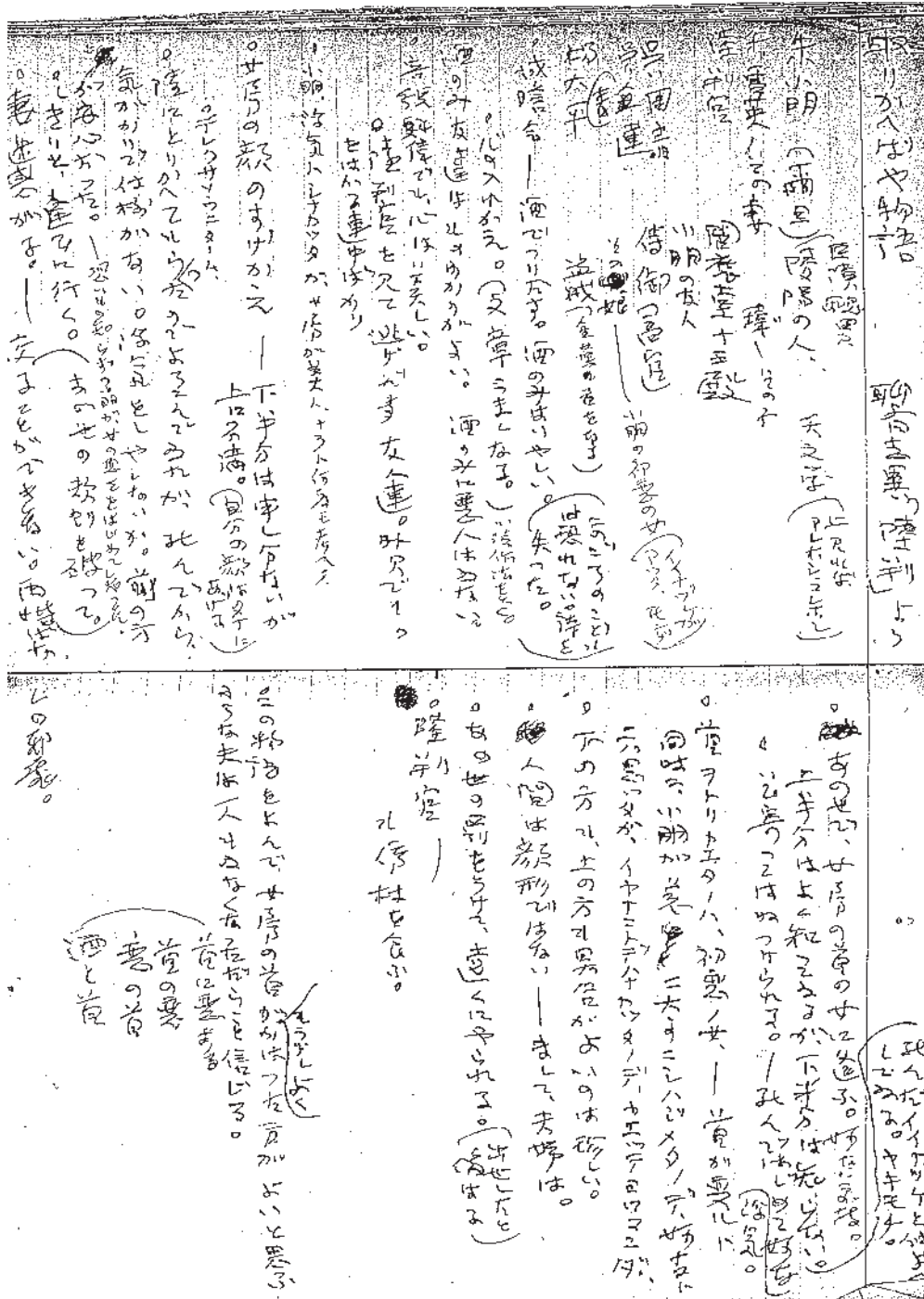
1) 『美女と妖怪——私版 聊齋志異』(昭和三〇年七月一日、学風書院)二七六～二七七頁

2) 玉井勝則『首を売る店』(大正一四年七月一〇日、内藤奎運堂)

3) 中村十生『郷愁の愛宕が丘—小倉中学・高校物語—』(昭和三五年五月二〇日、学習研究社)二二四頁

巨漢醜男

朱小明 (爾旦) 陵陽の人、 天文学 (上見ればアレホシ、コレホシ)
 朱雪英 その妻 瑋——その子
 陸判官 閻魔堂十王殿
 小明の友人 (イイナツケが)
 呉圃青 侍御 (高官) (アツタ、死ンダ)



呉青蓮 その娘——小明の初恋の女

楊大平 盗賊（金薫の首を切る）

○誠暗令——酒でつりだす。酒のみはいやしい。（このごろのこどもは恐れない。詩を失った。）

○心の入れかえ。（文章うまくなる。） 小説作法をとく。

○酒のみ友達はものわかりがよい。酒のみに悪人はゐない。

○容貌魁偉でも、心は美しい。

○陸判官を見て逃げ出す友人連。外見でものをはかる連中ばかり

○小明、浮気ハシナカツタガ、女房が美人ナラト何度モ考ヘタ。

○女房の顔のすげかえ——下半分は申し分ないが上は不満。（自分の顔はタナにあげる）

○テレクサソウニタノム

○陸にとりかへてもらったのでよろこんでゐたが、死んでから、気がかりで仕様がなない。

○浮気をしやしないか。前の方が安心だつた。——恐いもの知らずの小明が、女の悪さはじめて知つた。

○しきりと、逢ひに行く。（あの世の規則を破つて。）

○妻迷惑がる。——交ることができない。再婚ばなしの邪魔。

○あの世で、女房の首の女に逢ふ。妙な気持。上半分はよく知つてゐるが、下半分は知らない。死んだイイナヅケと仲よくしてゐる。ヤキモチ。

○いひ寄つてはねつけられる。——死んではじめて妙な浮気。

○首ヲトリカヘタノハ、初恋ノ女、——首ガ変ルト同時ニ、小明ガ急ニ大事ニシハジメタノデ、妙ナコトニハ 思ツタガ、イヤナコトデハナカツタノデ、カエツテヨロコシダ。

○下の方も、上の方も具合がよいのは珍しい。

○人間は顔形ではない——まして、夫婦は。

○あの世の罰をうけて、遠くにやられる。（出世したと偽はる）

○陸判官——も傍杖を食ふ。

○この物語をよんで、女房の首がもう少しよくなつた方がよいと思ふやうな夫は一人もゐなくなつただらうことを信じる。

（首に恋する 首の恋 恋の首 酒と首）

以上が「創作ノート」である。このノートにあるように、「取りかえばや物語」は、『聊齋志異』の「陸判」を元にして創作した作品である。この「創作ノート」は、作品を発表するまでに葦平が構想として考えた興味深い点がかかれていたので、詳しく後述してみたい。『聊齋志異』「陸判」を火野は、商務印書館版で漢和辞典を引きながら読んだことは、先に記したとおりである。商務印書館版『聊齋志異』について、火野は「やはりそのむつかしさに面倒くさくなつて投げだしてしまつた」と述べ、続けてこう記している。

それから、後年、柴田天馬氏の名訳が出るにいたつて、さらに往年の感動を新にしたのである。

柴田氏の訳文は原語をたくみに生かした実に気のきいたもので、その親切な註解とともに、昔、中途半端にしか読んでゐなかつた私をすこぶる満足させてくれた。終戦後は、北京からかへつてきた村上知行氏の訳が出版された。これはまた原文を思ひきつてくだいてしまつた平易な文章で、柴田氏とは、別個の味はひがあつた。⁴⁾

火野は、『聊齋志異』を漢和辞典を引きながら読んだり、柴田天馬、村上知行訳にて親しんだのである。「取りかえばや物語」発表の、昭和二六年までに出された柴田訳の『聊齋志異』には、大正八年版、大正一五年版、昭和八年版共にのっている。火野は、漢文を辞書をひきながら読んだか、柴田天馬訳および、村上知行訳『もだんらいぶらりい 聊齋志異上巻』（昭和二四年五月一五日、東西出版社）で読んだと考えられる。本稿では、村上知行訳『聊齋志異』「陸判」および、「取りかえばや物語」の初出をテキストをもとに考察を進めていく。

二 「陸判」と火野葦平「取りかえばや物語」の比較研究

a 『聊齋志異』「陸判」

「陸判」は、約七〇〇〇字、「取りかえばや物語」は約一八〇〇〇字の作品であり、一段から六段に分かれている。およそ、三倍の長さに加筆、再小説化しているのである。『聊齋志異』「陸判」の作品内容を記してみる。

朱小明という、豪放であるが、少しぼんやりした官吏が登場する。在る夜、皆で酒を飲んでいると、友人から、肝試しに、十王殿においてある木像のうち、緑の顔で赤い髭の極悪な容貌の陸判と言う判官の木像を運んでくるように言われる。十王殿は、毎晩拷問の気味の悪い声が聞こえ、皆に恐れられていた。朱はいとも簡単に陸判を運んできた。陸判を見た友人達は、余りの形相の恐ろしさに、すぐに戻すように言った。朱は、陸判に酒をかけ、朱の家で今度一緒に酒を飲もうと約束して、十王殿に戻した。数日すると、陸判は、朱宅を訪れた。それ以来何度も一緒に酒を飲み、そのうち、陸判に、朱の書いた文章の添削などもして貰うようになる。

ある日、朱が酔っぱらって先に眠っていると、胃がちくりと痛む。気づいたら、陸判が朱の胃や腸を取り出して整理していた。朱は、陸判という神仙の者に酒をかけるなどという無礼なことをしたので、殺されるのだと思ったが、そうではなかった。朱が文章下手なのは、迷う心を持っているためなので、いい心を持った死んだ人間と、心を取りかえているのだと言う。とりかえて整理すると、陸判はもとの通りに縫い合わせた。その後、朱は文章も上手になり出世していった。

朱の妻は美人ではなかった。朱は、妻の容貌には、不満を抱いていたが、顔より下には、満足していた。そこで、朱は陸判に、ぜひとも、自分の妻の首を亡くなった美人の首と取り替えて欲しいとお願いする。陸判は、承知し、死んだ美女の首を探し、妻の首と取りかえた。妻は美女になったのであった。美女の首とは、呉家の娘の首であった。娘は、二度結婚の約束をしたが、死に別れ、一九になっても嫁入りしない。悪人（楊大年）が、娘の部屋に入り込み、腰元を切り殺して、娘を無理やり犯そうとした

4) 『美女と妖怪——私版 聊齋志異』（昭和三〇年七月一日、学風書院）二七六頁

が、娘は抵抗したので、殺されたのである。朱の妻の首が、娘にそっくりなので朱が疑われるが、夢で娘から呉夫妻に顛末を話させた。

三十年経って、朱は陸判から後五日で死ぬと予言される。朱は、全てを整え死にそなえた。朱は幽霊になって時々夫人に会いに行く。しかし、あの世で遠方に赴任させられ、なかなか下界に来られなくなった。息子の瑋は、聡明で二五歳の時に進士となった。朱は久しぶりに下界で息子に会って満足し、立派な刀を渡し、この刀を持っていれば出世すると伝え、息子にあげた。瑋は後、司馬となり五人の子を産んだ。父が夢に現れ、渾という子に刀をあげるように言った。その通りにすると、渾は大いに評判がよくなり総憲となった。

これが「陸判」の話である。火野の「取りかえばや物語」は、「一段」から「六段」ある。火野の「取りかえばや物語」では、朱が死んだ後の話が全く異なる。また、『聊齋志異』「陸判」では、登場人物の名前は、陸判、朱小明、呉とだけしかないのに、「取りかえばや物語」には、朱の妻は、朱雪英、殺される娘は、呉青蓮、その父は呉周南、などと登場人物にそれぞれ名前がつけられている。後半を中心に、作品ストーリーや登場人物の設定の違いを順をおって説明していきたい。

b 語り手の登場 陸判と朱の出会いと「酒」の重要性

本節では、朱が木像の判官である陸判を仲間達の元に運んでくる場面での、『聊齋志異』「陸判」と「取りかえばや物語」との相違を見ていきたい。

「陸判」との根本的な違いは、「取りかえばや物語」には語り手が登場する点である。まず、作品の冒頭に次の如くに語り手は語る。

自分の女房が、もうすこし美人だつたら——世には、そんな風なことを考える亭主が、なくはないであろうか。筆者などは、夢にもそういうことを思つたことはないが、この物語は、そういう不都合な、心得ちがいの夫のために書くのである。舞台は中国であるが、人情は、東洋の君子国も、わが日本も、変りのある筈はない。⁵⁾

作品の冒頭部分で、これから起こる出来事を暗示している。語り手はこのように、全体を見通した批評をし、何度も登場する。「筆者などは」とあるように、語り手は筆者と一致するものとなっている。また、語り手は、ほとんどが酒と絡んで登場する。「陸判」にも「取りかえばや物語」にも登場する朱小名の「取りかえばや物語」における説明書きをみてみよう。朱は、次の如く記されている。

憂さをまぎらすように、日夜、酒を飲み暮らしていたのである。朝酒、昼酒、夜酒、大酒、濁酒、沈酒、淫酒、まさに、酒とともに、彼の人生はあつたといつてよい。筆者は、朱小明が善人であつたにちがいないことを、証明できる。酒飲みに悪人はいないということは、牢固たる筆者の信念である。少なくとも、酒を愛し、酒の酔いに前後不覚となる者に、根性のわるい者はいない。悪漢は、人前で泥酔したりなどはしないものだ。朱小明は泥のごとくに酔い、路傍に寝たりすることは、ほとんど連夜であつた。⁶⁾

5) 「取りかえばや物語」同 三七六頁

6) 「取りかえばや物語」同 三七七～三七八頁

『聊齋志異』「陸判」では、朱は、酒好きではあるとはされているが、「取りかえばや物語」ほどには大酒飲みに設定されてはいない。「酒飲みに悪人はいないということは、牢固たる筆者の信念である」と言う言葉は特に興味深い。「創作ノート」にも「酒のみ友達なものわかりがよい。酒のみに悪人はゐない」とある。無類のビール好きだった火野葦平のいかにも語りそうな言葉である。

「取りかえばや物語」は、『聊齋志異』「陸判」と同様、朱によって、陸判という判官の木像が酒宴の場へ連れて来られた。朱を肝試ししたためであり、もし、連れて来られたら、仲間達は朱の為に酒宴を開いてやると約束していた。しかし、陸判の恐ろしい形相に、仲間達は震え慄いて、もう一度十王殿に戻すことになった。朱が陸判のような恐ろしい形相の神をつれて来られたのは、「取りかえばや物語」では、「酒飲めば、たいていの人間が一流の人物になり、怖いものがなくなる」からとされている。『聊齋志異』「陸判」にはそんなことは書かれていない。「取りかえばや物語」では、酒は、非常に重要な要素なのである。朱はその後約束通り、仲間達から酒宴を開いて貰った。『聊齋志異』「陸判」では、酒宴開催のいきさつが描かれるだけであるが、「取りかえばや物語」では、酒宴を開いてやった友人達の心理を語り手は次のようにコメントする。

人間というものは、どんな切迫した場合でも、エゴイズムと慾とから絶縁できないものだが、この驚嘆と恐怖とのなかで、五人の朱の友人たちも、今日から十日間分の酒代をしてやられた口惜しさで、へたばつたまま、不景気な顔を見あわしたのであつた。⁷⁾

人間の慾がむき出しになっている。その後は、陸判が朱小明の家を訪れていく。朱は、陸判が朱の家に初めてやってきたときは、神仙の者にいたずらをしたので、殺されるかと思ったが、二人は次第に親友になっていく。これは、『聊齋志異』「陸判」も、「取りかえばや物語」も、同様である。「取りかえばや物語」では、語り手は次のようにつけ加える。

やがて、酒盛りになると、この二人は、たちまち十年の知己のごとくなつてしまつた。これは酒飲みの最大の特徴である。酒飲みは話が早く、ものわかりもよい。筆者の親友、故中山省三郎は、つねに、呑兵衛はいいなあ、と羨ましがりに述懐した。彼は一滴の酒も飲まず、お茶とサイダーですごしていたが、彼が十年間もつきあつた友人を、筆者に紹介すると、その友人が酒飲みである場合、たちまち筆者と意気投合して、一夜にして彼以上に親しくなるからであつた。朱小明と十王殿の閻魔とが、この酒徒の法則にしたがつて、ここに、一瞬の間に、刎頸の交を成したのである。⁸⁾

つまり、二人とも酒飲みであったために仲良くなったとある。『聊齋志異』「陸判」には、書かれていない「酒」の効果を強調している。これを火野は「酒徒の法則」とよぶ。

c 陸判による朱小明の心の入れ替え

『聊齋志異』「陸判」でも、「取りかえばや物語」でも、文章が下手な朱小明の心を、死者の中から探し出した立派な心と取り替えるために、朱が寝ている間に、陸判が内蔵を取り出して入れ替え、整理する場面がある。心を入れ替えた朱小明は、陸判に添削をしてもらわなければならないような以前の朱では

7) 「取りかえばや物語」同 三七九～三八〇頁

8) 「取りかえばや物語」同 三八二頁

なく、頭脳明晰で、文章も上手く、どんどん出世していった。ただ『聊齋志異』「陸判」では、朱は薄幸で郷科までしか上れないと予言する。「取りかえばや物語」では、陸判は、朱の心を取りかえた理由を次の如くに語る。

礎石のない空間に、文章の塔はできない。つまり、アプレ・ゲールの徒のような、一攫千金の成金根性では、一行の正しい文章も書けぬわけです。⁹⁾

このように陸判は述べ、朱の心を取りかえたのであった。アプレ・ゲール¹⁰⁾の徒を批判しているところは、注目すべきである。この「取りかえばや物語」は、昭和二六年に書かれ、まさに戦後の文学である。戦後に出現した昔からの習慣や考え方にとらわれない、戦後派世代の人間達を火野は強く批判していた。アプレ・ゲール批判は、「妖亀伝」¹¹⁾でも書かれている。戦前から活躍し、生きていた火野にとって、伝統を否定し、流行にとらわれすぎる風潮に危惧を感じていたのである。

語り手は、陸判の出世について、「春秋の筆法を借りれば、経国の大業をなし、世を救ったものこそ、酒である、といわなければならない」と述べ、酒の効能をここでも力説する。朱が、立派になったことは、陸判のおかげであったという噂が広がり、友人達がこぞって陸判に自分たちもなんとか心を取りかえてくれと頼む。陸判は了解した。ここまでは、『聊齋志異』、「取りかえばや物語」ともに同じである。が、「取りかえばや物語」の語り手は、

陸判官には、筆者と同様の性情があつたらしい。拒絶性能の欠如、これである。あの、たのまれたことは、なんでも断れない、人にいやな顔を見せたくない、という困った犠牲的精神である。¹²⁾

と語る。筆者自身の「犠牲的精神」や、「拒絶性能の欠如」という、単なるお人好しの性質については、同じく『聊齋志異』を元に改変し、再小説化した「鸚鵡変化」¹³⁾でも記されている。「鸚鵡変化」は無神経な人々が厚かましくもこき使い、拒絶できないために、消耗して不幸になっていく鸚鵡の阿英を描いている。陸判が友人達の頼みを断らなかつたというただその『聊齋志異』での記述から、想像力を駆使して、そこに火野は自身にも通じる「犠牲的精神」を読み取り、「取りかえばや物語」に取り入れるのである。

陸判は友人の頼みを引き受けたが、陸判にいざ会ってみるとその形相に恐れて、とたんに逃げていった。これは、『聊齋志異』「陸判」、「取りかえばや物語」も同じである。火野は「創作ノート」に「陸判官を見て逃げ出す友人連。外見でものをはかる連中ばかり」と記している。火野は「外見でものをはかる連中」を批判的に見、それを創作に生かしたのであった。

9) 「取りかえばや物語」同 三八四頁

10) 『日本国語大辞典』(縮刷版) 第一巻(一九九五年二月二〇日、第一三刷、小学館)には、「特に退廃的な、無責任で割り切った考えや行動をとる者や、基礎的な知識が身につけていない者などに対して、非難の気持をこめて使う場合が多い」とある。

11) 火野葦平「妖亀伝」(『小説公園』昭和二五年五月一日、第一巻第三号) 五六～一七〇頁

12) 「取りかえばや物語」同 三八六頁

13) 『オール読物』(昭和二五年四月一日、第五巻四号) 一六二～一七三頁

d 朱の妻の首のとりかえの相違

このようにして、友人の頼みは消えてしまったが、『聊齋志異』「陸判」、「取りかえばや物語」ともに、次のように話が展開する。朱は、妻の首から下には満足しているが、顔が美人でないことで悩んでいるので、心が入れ替えられるなら首を取り替えることも可能だろうと、朱は、妻の首を取り替えてくれるように陸判に頼んでみる。陸判は、朱の依頼に応え、死体になった美女の首を探しに行く。半月後（『聊齋志異』「陸判」では、数日後）、陸判は、美女の首を持ってきて、朱の妻の首と取りかえたのであった。語り手は、陸判が朱の心を良い心ととりかえても、「朱小明は、神通力のある陸判官も看破し得なかつた、もう一つの小さな悪い心を持つていた」と語る。その悪い心とは、妻の首を取りかえて美女にしてやろうという魂胆のことを指す。

ここで注意しなければならないのは、『聊齋志異』「陸判」では、妻の容貌について、美人ではないとあるが、詳しくは記述がないことである。「取りかえばや物語」では、妻雪英の容貌は、

色は浅ぐろく、顔は丸顔だが、鼻がすこしく天井をむき、口も大きく、唇も下品に厚ぼつたい。二重瞼の眼元が涼しく、やさしそうなところか、唯一の取柄であろうか。¹⁴⁾

と記されている。その上、結婚のいきさつも書かれ、「両親が在世中、義理に迫られて、恩ある縁辺からもらつた女房」で、「何の艶話も、色気もない」とある。つまり、恋愛結婚ではないのである。また、妻をとりかえる前の朱の寝姿について、

雪英はぐつすりと熟睡していた。それでなくてさえ醜女であるのに、口をだらしなく開け、涎をたらし、鼻を豚のように鳴らして高鼾をかいている寝姿を見て、朱は、これが永年つれ添つてきた女房かと、ほとほと愛想がつきる思いがした。自分のことは、棚にあげているのである。朱小明の寝姿の方が、もつと壮烈で、波瀾に富んでいる。しかし、自分の寝姿は見えない。¹⁵⁾

と記されている。このように、雪英の容貌の悪さが描かれている。ここで注意すべきは、朱が「自分のことは棚にあげている」と書かれている部分である。「創作ノート」にも「自分の顔はタナにあげる」とある。『聊齋志異』「陸判」では、朱の容貌は醜男なのかそうでないかすら書かれていないが、「取りかえばや物語」では、朱の容貌について「色男とはいえなかつた」とある。また、「創作ノート」には、「小明、浮気ハシナカツタガ、女房が美人ナラト何度モ考ヘタ」とあり、作品を構想する段階で、自分のことは棚にあげ、妻の容貌に拘る自分勝手な朱を描こうと計画していたのである。

妻のとりかえた首は、朱の初恋の呉青蓮の首であった。これは単なる偶然であったが、朱の片思いに終わった恋であり、「青蓮の方は朱のことなどは知らなかつた」のである。『聊齋志異』「陸判」ではただ娘の首となっていたのに、火野は初恋の相手と設定している（「創作ノート」に「首ヲトリカヘタノハ、初恋ノ女」とある）のである。「朱小明は有頂天の歡喜で、身体中がたざりたつてきた。もう我慢ができず、眠っている妻に武者ぶりついた。」そして、結婚して以来、「最大最高の熱演の夜」を過ごすのであった。

14) 「取りかえばや物語」同 三八二頁

15) 「取りかえばや物語」同 三八八頁

e 呉の娘の殺人事件

『聊齋志異』「陸判」、「取りかえばや物語」でも、楊大年という無頼漢が登場し、二度も結婚の約束をした男に死なれてしまった不幸な娘（「取りかえばや物語」では、呉青蓮）を無理やり犯そうとして、抵抗され首を落として殺してしまう。いかにも残酷だが、『聊齋志異』「陸判」では、朱の妻の首が娘の首になったという噂が広がり、朱が疑われる。しかし、娘が両親の夢に現れ、朱は無関係で、自分は楊大年に殺されたのだと言ってくれ、疑いが晴れる。『聊齋志異』では、夢に死者が出て顛末を話すという不思議な話になっている。いかにも怪異譚を集めたとされる文学である。そして、楊は捕まって服役する。

一方、火野の「取りかえばや物語」は、よりリアリスティックに描かれる。楊大年は、屍を姦して逃げたが、捕えられ、牢につながれ毎日塩のみをなめさせられる。裁判の結果、死罪となった。火野は悪人をかなり厳しく罰するのである。妖怪譚から現実的な話に改変されている。

その後、『聊齋志異』「陸判」では、朱は呉家の婿となり、三度昇進試験を受けようとしたが、規則が合わず受験できないままに、仕官の心がなくなってしまう。「取りかえばや物語」では、朱家と呉家は交歓し、呉家は取り子取り嫁の養子にしたいと考える。陸判に朱は学問をする人間であり、多額すぎる援助はかえって研学の妨げになると強く止められ、朱も「金持というものは、本能的に嫌いでもあつた」ので、養子にはならなかった。朱は、「好きな酒が、欠かさず飲めるだけで、充分」だった。注目すべきは、朱は酒好きだけで、金銭慾が強い強欲者ではない。ここでも、酒が絡んだ話に火野は改変しているのである。

f 朱小明の死とその後

朱小明の死とその後の書き換えが、最も大きな二作の違いである。順を追って説明していきたい。朱は、大変聡明な瑋という男の子をもうけるが、陸判にあと五日で死ぬと予言される。『聊齋志異』「陸判」では、瑋は七八つになると読み書きをし、九つで文章を作った。朱が死ぬのは、瑋一五歳の時であった。夫人と瑋は大いに泣き、朱との別れを惜しんだ。朱は、瑋に立派な人になるように伝え、一〇年後にもう一度再会しようと言う。瑋は、二五歳で進士¹⁶⁾となり、勅命で西岳の祭りに行った。すると、車中に父が見えたので、道のほとりに泣き伏していると、父は瑋の評判がいいことに満足していると言った。父は、これを持っていれば出世すると言って瑋に刀を渡した。そうして、風の如くに去って行ったのである。瑋は、後に司馬¹⁷⁾になり、五人の子を産んだ。父が夢に現れ、刀は渾にあげるように言う。その通りにすると、渾は、総憲¹⁸⁾となり、大評判になった。以上が、朱小明の死後の『聊齋志異』「陸判」の展開である。つまり、朱は、死後『聊齋志異』では、二度、一度は道に、そして二度目は夢に現れるだけである。しかし、「取りかえばや物語」では、全く違う展開を見せるのである。六段が最も大きな葦平の改作場面である。「取りかえばや物語」を説明していく。

朱は陸判の予言通り亡くなったが、死ぬ前に全て準備しておいたので、さすがに学家の名匠は違うと

16) 科擧の登第者（合格者）のことをいう。

17) 国家の軍政をつかさどる役人

18) 総督の別名

讀えられた。しかし、美人の妻が忘れられなくて、冥府の「鉄の規律」を破って妻に会いに来るのである。語り手は、その規律を「共産党の鉄の規律よりも、もつときびしいものだ」と記す。火野は作品中で共産党批判をしている。戦後に、火野は共産党批判をすることが多い。火野は後に次のような言葉を残している。

文化戦犯第一号というのが、「アカハタ」に出た直後CIA が来てね、若松の家に、僕は引き籠って、文学はもうやれまいと思っておったし、そうして逮捕されてもいいと思って、身辺の整理して待っていたんだ。そうしたら僕らみたいな小物を相手にしないのか、なんか知らんけれども、逮捕には来なかったですが、二、三回調査に来た。¹⁹⁾

戦争中、軍の命令にも逆らえず、ただ従軍作家として火野葦平は、任務を遂行していた。いわば、真直ぐで真面目な人間であったのである。そのことが仇になり、価値観が百八十度変った敗戦後は、左翼主義者に糾弾され、苦しめられることになった。戦時中は、ベストセラー作家で英雄扱い、敗戦後はいきなり、「文化戦犯」呼ばわりで、かなり火野も煩悶したであろう。昭和二〇年一二月一二日の『アカハタ』の「戦争犯罪人名簿〈第一回〉」に、「文学」部門として、菊池寛、久米正雄らと共に、火野葦平の名前がある。共産党の『アカハタ』による報道が大きなきっかけとなったことで、火野自身も忸怩たる思いが共産党にあったと思われる。昭和八年、共産党のスパイとされ小幡達夫、大泉謙三らはリンチの上死傷させられるというスパイ査問事件がおきた。当時関与されたとされていた、宮本顕治、袴田里見らは逮捕され、敗戦後まで監禁されていた。宮本顕治「スパイ挑発との闘争——一九三三年の一記録——」（『月刊読売』昭和二一年三月号）によると、共産党規約により査問を受けることが予め承諾されていたという。「共産党の鉄の規律」という葦平の言説は、こんな同時代の共産党員の言説からくるのかもしれない。ちなみに、リンチ容疑で逮捕されていた宮本顕治、袴田里見らは、昭和二〇年一〇月四日付の政治犯の釈放等に関する覚書により、同月中に釈放された。戦時中、政治犯として捕えられていた人は、釈放され、戦時中英雄扱いだった軍人等軍関係者は戦犯とみなされることになる。

さて「取りかえばや物語」に戻ろう。「取りかえばや物語」「創作ノート」にも、「しきりと、逢ひに行く。（あの世の規則を破つて。）」と記されていて、作品発表時から、規則を破って妻に何度も会いに来る朱の姿を描こうと計画していた。その冥府の規則とは、「亡霊と生きている女体との接触を、絶対に禁じている」ものであった。また、「みだりに娑婆へ出現することを許さない」掟であった。朱は、それでも閻魔の眼を掠めて、妻雪英に会いに行くが、肉体的な接触ができないまま、酒を煽るばかりである。どんどん酒の量も増し、冥府へ帰りつけず、三途の川でごろ寝したりし、陸判にそっと冥府に届けあげられる始末であった。

ある日、朱は、あの世で、昔の雪英の首をした呉青蓮に出会った。顔は、朱のもともとの妻の顔であるが、心は呉青蓮なので、朱を見て、何の反応もしないが、朱の心は「すこぶる混乱した」。呉青蓮は、死にわかれた昔の恋人といたのである。朱は二人の仲睦まじい姿を見て、「嫉妬がむらむらとわいてくるのをおぼえた」。自分の妻が浮気をしているような錯覚にとらわれたからであった。すると、今度は、娑婆にいる美人の妻が気になり始めた。「取りかえばや物語」は、この朱の、冥府と娑婆の妻への両方の嫉

19) 火野葦平「中共・印度あれこれ話」（池島新平・扇谷正造『縦横おかめ八目』昭和三一年五月五日、修道社）二五頁

妬の思いが描かれ、非常に面白い作品となっている。呉家の夫婦は、朱小明の死をかえって喜び、自分の娘の顔をした娼婆の雪英に適当な婿をとり、引き取ろうとしきりに再婚を勧めた。朱はぎりぎり歯を削りながら、雪英が断ってくれると期待して固唾を飲んでその様子を見ていた。しかし、雪英の答えは、「もうすこし、考えてみますわ」であった。「創作ノート」には「恐いもの知らずの小明が、女の悪さをはじめ知った」と書かれているが、その時の朱の心理が次の如くに活写されている。

もうすこし?——なんたることか。雪英の心は動揺しているのである。否、亡夫から離れつつあるのだ。身体の下半分も上半分も完璧である若い女の生理と感情は、理屈を超えて、なにかを求めつつあるのだ。事実、朱小明の死後、雪英にいい寄つて来た若い男は、少なくなつた。雪英は、いづれも、それを斥けはしたが、女の肉体はやはりなにかを求めているのだ。しかし、うるさくあらわれる夫の亡霊が、雪英を監視していて、その生きる新しい道をふさいでいる。……朱は、はげしいチレンマに陥る。女房が美しくなることを望まなかつたら、今ごろ、こんなに苦しみはなかつたのである。すべてのものごとに、絶対というものはなく、一切が相対的關係において処理されるということを、朱小明は、学問からではなく、自己の愛憎の苦しみのなかで、悟った。²⁰⁾

ここでの朱は、妻が美人であつたらなどという自分勝手な望みを持ったことを後悔している。「すべてのものごとに、絶対というものはなく、一切が相対的關係において処理される」ことを悟つたという点が実に重要である。火野葦平が、「取りかえばや物語」で描く語り手は、火野自身に近いことを先に記した。そのことと朱の心理表現とをあわせて考える必要がある。火野は、変わらない真情を賛美していく一方で、世の中の主義や思想が相対的關係において変化しても止むを得ないことを、「取りかえばや物語」を書く中で悟っていった。そうして、自分で納得していったとは考えられないであろうか。しかもそれは、学問や知識とは無関係であつた。

火野は、終戦後、これまでの価値観と違う価値観になって戸惑い、苦しんだ。日本国のために、戦争に全てを捧げるべきであるとされていた戦時中、真面目に任務を終えた火野は、公職追放を受けるのである。火野の戦争作品は、決して戦争を鼓吹するものではなく、戦時下で見てきた真実の兵隊の姿を作品化したものであり、その兵隊の真の姿が人々に感動を与えた。学問をしても、書物を読んでも、やはり公職追放を受けたことには納得できない何かがあり、火野はそれを、自分で乗り越えなければならなかつたのであつた。

『中国艶笑風流譚』『美女と妖怪——私版 聊齋志異』『いろといのち』などにおさめられた火野葦平の『聊齋志異』改変物は、ほとんどが、公職追放中に描かれた。火野自身も、「この終戦直後、私は追放をうけて、しばらくペンをしばらく使っていた時期があつた。執筆禁止ではなかつたが、内容を制約されたため、私は窮して、救いを『聊齋志異』に求めた」²¹⁾と記している。火野は『聊齋志異』に救いを求め、『聊齋志異』を読み、人間とは何かを見つめ改作していく中で、これからの戦後社会を生きていくエネルギーを見出していったのであろう。

さて、「取りかえばや物語」に戻る。その後朱は、混乱した中で「どちらが、いつたい、ほんとうの女

20) 「取りかえばや物語」同 三九七頁

21) 火野葦平「三十年愛読の書」(『底本聊齋志異月報三』1955年8月30日、修道社)七頁

房なのか、わからなくなってしまう」のであった。そうして朱は「二人の女に心を使う恋の奴」となり、神経衰弱に陥いたのである。やけくそになって、朱は、冥府にいる呉青蓮に近づくことを決意する。そして次の行動に出た。

『朱小明です』

『お聞きしない名ですけど、なにか、御用でも？』

『仲よくしましょう』

『なんですつて？』

『あなたと僕と、仲よくするんです』

『御冗談ばかり』

『冗談なもんか』と、いらだつて来て、朱小名の眼は、狂気を帯びてきた。言葉も荒くなった。

『一生の問題に、冗談なんか、いわん』

『一生の問題？』

『君は、僕と仲よくする義務がある』

『……？』

『君は、僕の恋人だ』

『……？』

『いや、君は、僕の女房だ』

そういつて、青蓮に抱きつこうとした朱は、はげしく頬をたたかれたうえ、河原のうえに突きたおされた。したたかに腰と頭とを打ち、ふらふらと起きあがったときには、青蓮の姿はどこにもなかった。いつか、まわりを大勢の亡者たちが取りかこみ、げらげらと笑いころげているのだつた。²²⁾とうとう、朱はこんな行動に出してしまったのである。朱は最後、冥府で裁判にかけられ、独岩居の刑を言い渡され、最地底の岩窟の独房に入れられる。しかし、朱は「ほっとしたような不思議な明るさに満たされていた」のであった。陸判も冥府の規律を怠っているにも関わらず友人の朱を助けたとして位を一等下げられた。このような結末で物語は終わる。

結びにかえて

以上、本稿では『聊齋志異』『陸判』と「取りかえばや物語」の比較研究を行ってきた。『聊齋志異』『陸判』では、形相は怖いけれど、陸判という神仙の者の力を借りて、自分の妻も美人になり、子供達も含めて出世繁栄していった朱一家が記されているのである。陸判の神通力で何もかも良くなったという陸判の神力が強調されている。他方、「取りかえばや物語」では朱の息子の璋は、五人の子を成し、渾が総督となって名を残したことまでは書かれるが「これは、後のこと」とあり、朱の子供に刀を渡すシーンも全くない。「取りかえばや物語」の後半は、朱が二人の妻をめぐって、そのどちらにも嫉妬していく。そうして、首を取り替えて貰うなどどということを思いついたことを後悔するが、取り返しがつか

22) 「取りかえばや物語」同 三九八～三九九頁

ないという物語になっている。「陸にとりかへてもらったのでよろこんでゐたが、死んでから、気がかりで仕様がな」(「創作ノート」) 朱小明が描かれる。現世では「浮気ハシナカタ」(「創作ノート」) 朱小明が、「死んではじめて妙な浮気」(「創作ノート」) をしてしまう。また、朱は、妻の首を「陸にとりかへてもらったのでよろこんでゐたが、死んでから、気がかりで仕様がな。○浮気をしやしないか。前の方が安心だつた」(「創作ノート」) と叙述されるのである。嫉妬、浮気などがテーマになり、顔で人間は判断してはいけないということが示されている。「豪放磊落」で「勤厳居士」と設定されていた朱であり、金銭慾もない。普通の真面目でつましく明るい人間であっても、つい美女に惹かれてしまうと言う男の性も浮き彫りにされている。「陸判官も、女に惚れたり、惚れられたりしたことのない野暮神であつた」ので、朱小明の妻の首をとりかえるなどという「悪い心」を、「ついに見のがしたのであつた」。葦平の記した「創作ノート」には、「首に恋する 首の恋 恋の首 酒と首」などとメモ書きされている。人間は首に恋したりはしないものであるし、滑稽すぎるのであるが、この「取りかえばや物語」では、首に恋したために悲劇を迎える結末となっている。「酒と首」(「創作ノート」) とあるが、酒も重要である。最後に、陸判は、「懲り懲りして、しんみりと、『しばらく、酒をやめよう』」と呟く。酒は、友情を深める。そして、酒飲み「悪人はゐない」と、酒豪の葦平は、酒の効果力を力説するが、同時に「酒のみはいやしい」(「創作ノート」) という酒の悪い面も描いている。火野は過剰なまでに朱や陸判を酒好きに変え、酒の飲み過ぎは、冷静な判断力を鈍らせることも示しているのである。

『聊齋志異』「陸判」のように、妻を美人にしたところで、朱は幸せにはならなかった。火野は、「人間は顔形ではない——まして、夫婦は」と「創作ノート」に記している。「取りかえばや物語」は、夫婦愛も重要なテーマである。火野葦平は、「私はエロチシズムの正しいありかたをつねに考へてきたし、人間の根源に根ざしてゐる性の問題も、夫婦といふ正常な関係のうへに考察されてこそ、人間の退廃をふせぎ得ると信じてゐる」²³⁾ と記している。火野は、外見に惑わされないで、夫婦愛を大切にしていくことで、人間は退廃することなく生きていけることを強調したかったのであろう。「取りかえばや物語」の作品最終末尾は、「この物語を読んで、妻の顔がもうすこし美しかつたら、などと考えるような夫は、一人もいなくなつたと信じる」とある。このことは「創作ノート」執筆時にも、少し文章をかえ同様の内容で記されている。火野は、『聊齋志異』「陸判」という摩訶不思議な幻想物語を、夫婦愛の重要性を主題とした改作を施し、自己流に再小説化したのである。

岩下俊作は、「洋洋たる大河」の中で、火野葦平は、「人間と人間の関係、日々思ひ悩んでゐる社会と人間の争い、個と個、個と集、集と集のからみ合ひ、憎み、愛し、悲しみ、笑ふ、この複雑微妙な人間の行為と心理」²⁴⁾ を常日頃から考えていたというが、「取りかえばや物語」は、ユーモアの中に、人間とは何か、人間はどう生きるべきかを示した作品と言えるだろう。

23) 火野葦平「あとがき」(『世にも不思議な夫婦愛の物語』昭和三〇年六月五日、学風書院) 二五二頁

24) 岩下俊作「洋洋たる大河」(『河伯洞雅板志 鈍魚庵』昭和28年5月) 頁記載なし